■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

14　多和田葉子「国境を越えることば」

●参考　多和田葉子『エクソフォニー――母語の外へ出る旅』【914/T64/1】（北野高校図書館に他多数あり）

■目標　・内容をきちんと切り分けて読む。
　　・材料探しをして、組み立てる。

■追跡

①　ある言語で小説を書くということは、その言語が現在多くの人によって使われている姿をなるべく真似するということではない。同時代の人たちが美しいと信じている姿をなぞってみせるということでもない。むしろ、その言語の中に潜在しながらまだ誰も見たことのない姿を引き出して見せることの方が重要だろう。そのことによって言語表現の可能性と不可能性という問題に迫るためには、母語の外部に出ることが一つの有力な戦略になる。もちろん、外に出る方法はいろいろあり、外国語の中に入ってみるというのは、そのうちの一つの方法に過ぎない。

問題意識の確認。書き手は、小説家。「私」と主語を立てて書き換えてみると、

「私は、多くの人が使っていることばをマネしたり、なぞったりしない。日本語の中に潜在しているけれど、まだ誰も見たことのない新しい日本語表現を引き出して見せたい。そのためには――いったん、日本語の外へ出る＝外国語の中に入る――外国語で創作してみる、という手がある。」

やってみたらどうだろう？　うまくいくだろうか？

☆〈むしろ〉は不等号。出てきたら、必ず、何と何の比較か、どちらが優位か、確認せよ。

②　外国語で創作するうえで難しいのは、言葉そのものよりも、偏見と戦うことだろう。外国語とのつきあいは、「上手」「下手」という基準で計るものだと思っている人がドイツにも日本にもたくさんいる。日本語で芸術表現している人間に対して、「日本語がとてもお上手ですね。」などと言うのは、ゴッホに向かって「ひまわりの描き方がとてもお上手ですね。」と言うようなものでとても変なのだが、まじめな顔をしてそういうことを言う人が結構いる。創作者が外国人だと、急に、「上手」「下手」という基準で見てしまうらしい。

ここでいう偏見とは何か。「外国人の創作を、言葉の「上手」「下手」という基準で計ろうとすること」。英語なら英語を母語とするネイティブが、日本人を上から目線で見る。ニホンジンにしては、オジョウズですネ。日本語を話す「外国人」に対する日本人の態度も同じ。日本語で著述をする外国人はたくさんいるが、著述の中味よりまず、「お、日本語完璧じゃん」と思ってしまう部分があるのでは？

ジョウズかどうかの判定は、違和感の検知としておこなわれる。ネイティブの耳が「訛っている」と感じるかどうか。「訛り」のまったくない自然な日本語がテレビから聞こえてくる。画面を見て、その語り手が黒人や白人だったと知ったとき、はっ、とする、その感じ。

③　日本人が外国語と接する時には特にその言語を自分にとってどういう意味を持つものにしていきたいのかを考えないで勉強していることが多いように思う。すると、上手い、下手だけが問題になってしまう。そうなってしまう歴史的背景もあるだろう。特に英語やフランス語など西洋の言語は、日本社会の内部での階級差別の道具として使われてきた。英語が下手だと入試に落ちて一流大学に行けないというだけのことではない。もっと漠然とした「階級意識」の演出に外国語が使われることが今でもある。最近日本のマンガを読んでいたら「このフレンチ・レストランはメニューもすべてフランス語のみ、高級な客しか相手にしない。」という文章があった。外国語を習うこと、留学するということは「高級に」なること、つまり普通の人と差をつけて、国内で階級を上へ這い上がるという象徴的な意味を持っているらしい。しかも、誰が上手で誰が下手かということが確実に言えるということは、それを決定する権威が自分たちではなく、どこか「外部の上の方」にあるということである。その権威は日本で抽象化された「西洋人」の偶像であり、その権威が、自分の言葉が「上手」かどうかを決めてくれる、という発想である。それは（家元制度的な発想と言うよりは、むしろ）**読解問題1** 植民地的な発想だと言えるだろう。なぜなら、家元制度では師匠は組織の内部の人間だし、抽象化された偶像ではなく一応血の通ったひとりの人間だからだ。抽象化された「西洋人」を権威機関として崇めるということは、具体的な西洋出身の個人を無視するということにもなる。実際に生きている生身の西洋人は、トルコ系ドイツ人、韓国系ドイツ人、インド系イギリス人や、ベトナム系フランス人、アフリカ系アメリカ人、日系アメリカ人などいろいろな人たちから成り立っているが、そういう多様性があっては、「西洋」が差別の機械として機能しないので、生身の西洋人は無視し、自分の頭に思い描いている「西洋人」像を保持するというような状況が、ごく最近まで日本にあったような気がする。

どうだろう？　今もあるのだろうか？　上の方にある、抽象化された「西洋人」の偶像という権威――そこへ這い上がるための英語学習というステイタス。――もしあるのだとしたら、それが「英語ビジネス」を駆動する根っこにあるものなのかもしれない。英語ぺらぺら幻想と揶揄されている抽象的な（劣等感とワンセットになった）憧れ。黒船以来の、辺境島国の劣等（列島？）感ＤＮＡ？

読解問題1　日本人のどのような考え方が「植民地的な発想だと言える」のか。

☆**傍線部を延長**し、順に☆**指示内容を補え**ばいい。材料を探し、構文を決め、組み立てる。

（1）材料探し

「それは……植民地的な発想だ。」

「その権威は日本で抽象化された「西洋人」の偶像であり、その権威が、自分の言葉が「上手」かどうかを決めてくれる、という発想」

「上手いか下手かは、自分たちではなく、どこか「外部の上の方」にある権威が決めてくれる」

「西洋の言語が上手い・西洋に留学する」＝「国内で階級を上へ這い上がるという象徴的な意味を持つ」

（2）構文決め

そのためには、「植民地的」の意味するところを、解きほぐしておくのがいい。植民地では、多く、宗主国（支配する国）の言語が操れる者が、その国内におけるエリート階層となる。例えば、大英帝国（英語）→インドのエリート（英語）→インドの民衆（現地語）といった関係だ。宗主国と植民地を媒介する「現地のエリート」が必ず存在する。かれらは、宗主国に対しては劣等感を、現地の大衆に対しては優越感を持つ。

「材料」の中にも、A外国語ができる自分は「高級だ」／Bでも、その自分の認めてくれるのは西洋人様だ、といった二様の意識が示されていた。

「Aと考える一方、Bと考える。」といった形が考えられる。

【解答例1】西洋の言語を習ったり、留学したりすることを階級を登る高級なことと考える一方、自分の西洋語が上手いか下手かについて決めてくれる権威を、どこか上の方に存在する、抽象化された西洋人の偶像に求めようとする考え方。

【解答例2】西洋の言語を習い、留学することに階級的な優越感を感じる一方、どこか上の方に存在する、抽象化された西洋人の偶像に対して権威と同時に劣等感を抱き、自分の西洋語の巧拙の評価をその権威に委ねようとする屈折した考え方。

「植民地的」ということばがもつ、ねじれた感じを出すには、優越感／劣等感を使う手もある。「劣等感」は本文のキーワードでもある。

言語は階級を映す。ことばは思考やコミュニケーションのためのものだから、本来、人間の上下とは関係がない。しかし、あることばは、あるコミュニティーに所属することによって習得されるから、そのことばは、そのコミュニティーの政治的布置を表現するものとなってしまう。例えば、武士は武士の言葉、商人は商人の言葉といったように。さらに、中央集権的な体制で社会が構成される場合、中央の言葉――方言の間にも、格差が設定される。

西洋の宗主国――植民地、という、まったく異なる言語体系の間には、さらに強力な社会の格差が反映する。

しかし、身分制もなく、国民全員が標準語を学校で学び、植民地も解放されたはずの現在、ことばに階級性が反映されるなんてことは、もうないのでは？　――いえいえ。そうは問屋が……。

●参考　田中克彦『ことばと国家』**【801/T5/2b】**（北野高校図書館）

④　もう二十年以上も前になるが、まだ日本に住んでいた頃、アテネ・フランセで『車に轢かれた犬』という映画を見た。日本で暮らす西アフリカから来た日本文化研究者の話だが、彼は、日本に住んでいるフランス人たちには「アフリカには餓死している人がいるのに君は日本学なんかやっていていいのか。」と言われ、飲み屋では酔っぱらった日本人に「アフリカでは人の肉を食うって本当ですか？」と聞かれ、かっとなってテーブルをひっくり返してしまう。フランス語を教えるアルバイトをしようとして広告を出すと、希望者の若い日本人女性が家に訪ねて来るが、彼がアフリカ人であるのを見ると驚いて走って逃げて行ってしまう。

／このシーンは、日本人が「フランス語」というものに背負わせている屈折した**願望**と、**劣等感**から来る自覚症状のない**不安**を鋭く照らし出しているように思った。「自分たちはアフリカと同じくヨーロッパ人が勝手に野蛮人と見なしていたアジアの人間であるが、今は**金持ち**になったので、そのお金で高い授業料を払ってフランス語を習うことで、野蛮人ではないことを再確認したい。」と無意識に思っているのに、よりによって野蛮人と思われ続けた被害者の代表とも言えるアフリカ人がフランス語の教師として姿を現したので、あわてて逃げていったのだろう。これはつまり、日本人はヨーロッパの野蛮観をなぜかそのまま受け入れてしまったということになる。

④段落は、さらにいくつかに分けて読んだ方がよい。☆**必要に応じて、形式段落をさらに分けよ**。書き手の形式段落の切り方が必ずしも適切だとはいえない。自分の理解のために、適宜切り、印を入れるなどするといい。特に〈例〉とそれについての〈考え〉の部分は、その対応と切り分けを意識的にやりながら読む方がいい。

「西アフリカから来た日本文化研究者」は、フランスの旧植民地出身の研究者なのだろう。彼は、フランス語が使える。

日本に住んでいるフランス人たちの言いぐさには、外国の文化を研究していいのは、自国が経済的に（また文化的に）充分満ち足りている国の人間に限られる、という考えが隠れている。例えば、フランス人になら、日本文化の研究は許されるのだろう。この意識には、やはり宗主国（支配・先進）――植民地（被支配・発展途上）という図式が反映されている。かつて日本が、とにかく文明開化に役立つ知識と技術を最優先して輸入したのと

似ている。また、逆に、西洋のまなざしが、異国情緒あふれる異文化として、日本（やその他アジアやアフリカや…）を研究したのと同じだ。「進んでいる」西洋にはその「権利」があったわけだ。

日本人による「アフリカでは人の肉を食うのか」発言は、「進んでいる」日本（アジア）――「遅れている」アフリカという意識の反映。

この「遅れている＝野蛮な」アフリカ意識が、「逃げ出した」事件を引き起こした、と筆者は分析する。その「アフリカ＝野蛮」意識はどこから来たのか。筆者の答えは、ヨーロッパ人がアフリカを野蛮と考える見方をなぞったもの。いつのまにか、日本人は、対アフリカについては、ヨーロッパ人の位置に自分を置いていたのだ。

しかし一方、先にもあったように、日本人のアタマには、西洋人という抽象的な権威が残っている。ことばの学習を通じて、おそるおそる西洋人の場所に自分を重ねようとしたとき、思い浮かべていたのとは違う〈顔〉が現れて驚いた。この驚きは、フランス人としての自分の顔が映ると思って鏡を見たら、アフリカの人の顔が映った、という驚きである。

自分は整形して、思い描いていたとおりの顔になったと思っていたら、元の顔が映っていたというような。これが、筆者のいう不安―もしかしたら自分はまだ劣等民族のままなんじゃないか、という不安のイメージだ。

／このような妙な劣等感は、経済成長によって隠蔽されはしたが、消えてなくなったわけではない。日本人が野蛮人ではない理由は、革靴だけが文明なのではなく足袋も文明なのだという単純な理由からなのだが、そういう考察は省略されてしまって、日本人はお金を持っているから野蛮人ではない、という変な形で傷を癒やそうとしていた時代に、わたしはまさに生まれ育ったことになる。

／わたしがドイツに移住した一九八〇年代には、ヨーロッパで高級品を買い漁ったり、高級レストランに行くのが日本人ばかりであることを中年以上の日本人自身が変に強調したがったのは、それで潜在的劣等感の巻き起こすストレスが解消されたからだろう。泡立つバブルの泡銭を使って贅沢して楽しんだというなら分かるが、そうではなくて、その買い物熱には、怨みを金で晴らすというような攻撃性が感じられた。

黒船以来の日本の劣等感は、日露戦争～第二次大戦まで、暴力の拡張として克服がめざされたが挫折、戦後は軍事を捨て（させられ）、経済成長による克服をめざした。実体の伴った経済成長は一九七〇年代初めで鈍化していたが、ここでいう一九八〇年代のピークは、いわゆるバブル経済という実体のない、見かけだけの「円」の膨張だった。

お金で劣等感を晴らすことに対して、筆者は冷ややかに見ている。読み取るべきなのは、①日本人にはずっと続く、西洋に対する劣等感がある、②お金では劣等感を晴らしきれない、ということだ。

／その結果、ヨーロッパ中心主義を外から見て無力化するチャンスを逃してしまっただけでなく、ヨーロッパ文明を消費者の文明としてのみ捉え自分たちをその一部であるという考え方が一般化し、歴史が消しゴムのカスになって机の下に払い捨てられてしまったような気がする。

筆者は「ヨーロッパ中心主義を、（日本という）外から見て無力化するチャンス」があった、と考えている。「ヨーロッパ中心主義」は悪いものと捉えられているから、先のフランス人のアフリカへの偏見などと重なる。

しかし一方、「ヨーロッパ文明」ということばは、悪いものとして使われているわけではない。そこには、ヨーロッパが長い間に蓄積した「歴史」という遺産が含まれている。文化、芸術、思想、科学技術……近代が達成したさまざまな精華は、ヨーロッパの歴史によって育まれたものだ。夏目漱石が言ったように、その文明は、自ら内発的に進化してきたものである。例えば「人権」という考え方ひとつ取っても、それが王政から共和制へ、さまざまな闘いを経て獲得されてきたことがわかる。

なのに、日本人は、「消費者の文明」の部分だけを追い求めた。歴史なんて知らねーよ。リッチになって、好きなものを買う。それが一等国の証というもんよ。

／たとえば、最近の日本人は「アジアに行く。」などと言う。わたしなどは「え、どういう意味？」と驚くが、彼らにとって「アジア」には日本が入っていないから、この言い方はおかしくないのだそうだ。アジアを地理的、歴史的に捉えず、経済的な単位として捉えているらしい。

今も「アジアに行く」なんていうのかしら。しかし、〈日本／その他のアジアひとまとめ〉といった意識は今もありそうだ。この文章は、二〇〇三年頃に書かれたから、まだ、飛び抜けて経済大国の日本／その他のアジア、という図式にリアリティーがあったのだろう。しかし、かつて日本が誇った家電メーカーが、アジアの企業に買収されるなど、今はもう、経済で覇を唱えることもできない。

東日本大震災（2011）以後のプロジェクト、東京スカイツリー（2012）、リニア新幹線計画（2011）、東京オリンピック決定（2013）、大阪万博決定（2018）は、敗戦後の、東京タワー、新幹線、東京オリンピック、大阪万博という経済成長プロジェクトを正確になぞっている。歴史はこのように見かけの上で反復されるが、その動因は経済にしかない。これは、ある劣等感や不安を抱く人格が、特殊な成功体験に依存し、それを（もはや適合しないにもかかわらず）反復しようとする症例に見える。

⑤　日本の劣等感を取り上げるのは時代錯誤で、今の人はそのようなことは問題にしていない、と言う人がよくいる。フランス語を学ぶのは単に楽しいから、パリに行くのは買いたいものがあるから、フランス料理を食べるのは単に美味しいから。それだけのことで、

もう劣等感も怨みもどこにもない、何も難しいことなど考える必要はないのだ、と。でも、

読解問題2 ヨーロッパ中心主義と日本のねじれた国粋主義の問題は、乗り越えられたかのように見えるだけで、実際には手つかずのまま一万円札の下に埋まっていたような気がする。経済危機の時代が、それらの問題について考え直すいい機会になれば、バブルもはじけがいがあったというものだと思うが、なかなかそうもいかないようだ。バブルがはじければ今度は、フランス語などの「外国語」は単なる飾りであり贅沢品だからやめて、本当のビジネスに役立つ英語だけやっていればいい、という方針に無反省に移行してしまう傾向が出てくる。それで、日本の大学は英語以外の外国語教育の予算をどんどん削っているらしい。

「本当のビジネスに役立つ英語だけやっていればいい」って、ほんとうにそうなっている。英語の所を、日本語に置き換えれば、次期指導要領の掲げる「現代の国語」の考え方と重なる。

フランス語なんていらねえよ。英語にお金をかけな。というわけで、英語産業は、肥え太る。文学なんて、いいからさ。来月からの出張に役立つ英語をレッスンしてくれよ。――このように、言語内で、さらに価値の格差が設定される。その基準は、それで儲かるか、儲からないか。

⑥　外国語をやることの意味について本気で考えなければ、外国語を勉強することによって逆に国の御都合主義にふりまわされ続けることになってしまう。セネガルからの帰りの飛行機の中で、エール・フランスの出してくれた美味しいお菓子を食べながら、わたしはそんなことを考えていた。

外国語をやることの意味について本気で考える。この「外国語」の部分にも、他のさまざまな学びの対象が代入できるだろう。もしそのときに、それで儲かるか、儲からないか、という基準しか思いつかなかったとしたら、それはたいへん不幸な人生を招来するだろう。

「儲かるか、儲からないか」で生きる期間は、人生九〇年時代のうち、三十年程度だ。日本にも、そういう時代があり、その三十年は過ぎた。筆者の洞察を具体的な希望に転換する時代が来ていると考えた方がいい。

読解問題2　「ヨーロッパ中心主義と日本のねじれた国粋主義の問題」が「実際には手つかずのまま」になっていると筆者が考えるのはなぜか、まとめさない。

☆なぜ→どのように／どんな点で。「どんなことを根拠にして、筆者はそう考えるのか」と問いを変換しよう。

「……ということを根拠にして、筆者は、ヨーロッパ中心主義と日本のねじれた国粋主義の問題が実際には手つかずのままになっていると考えている。」

「ヨーロッパ中心主義と日本のねじれた国粋主義の問題」とは何を指しているのか、検討しておこう。「ヨーロッパ中心主義」が出てくるのは、④段落。

「その結果、ヨーロッパ中心主義を外から見て無力化するチャンスを逃してしまっただけでなく、ヨーロッパ文明を消費者の文明としてのみ捉え自分たちをその一部であるという考え方が一般化し、歴史が消しゴムのカスになって机の下に払い捨てられてしまったような気がする。」

ここが該当部分だろう。「日本のねじれた国粋主義」とは何か。「日本の国粋主義」なら、それは、日本はもともと純粋にそれとしてすばらしい国なのだ、という考えを指す。しかし、ここで「ねじれた」とあるのは、「ヨーロッパ文明を消費者の文明としてのみ捉え自分たちをその一部である」と考えるやり方を指すだろう。短くすると「自分たちはヨーロッパ文明の一部だ」という考えである。日本はヨーロッパ文明の一部になったからエライ。ヨーロッパ文明＝消費者の文明。日本＝消費者の文明。∴日本＝ヨーロッパ文明。……というアクロバティックな（ねじれた…）論理である。

●材料探し

（したこと）

「ヨーロッパ人は、アジア人やアフリカ人を野蛮だと思っている」

「日本人はヨーロッパの野蛮観をなぜかそのまま受け入れてしまった」

「日本人はお金を持っているから野蛮人ではない、という変な形で傷を癒やそうとした」

（しなかったこと）

「日本人が野蛮人ではない理由は、革靴だけが文明なのではなく足袋も文明なのだという単純な理由からなのだが、そういう考察は省略されてしまった」

「ヨーロッパ中心主義を外から見て無力化するチャンスを逃してしまった」

「歴史が消しゴムのカスになって机の下に払い捨てられてしまった」

（具体的な現れ）

「バブルの頃、ヨーロッパで高級品を買い漁ったり、高級レストランに行くのが日本人ばかりであることを中年以上の日本人自身が変に強調したがった」

「最近の日本人は「アジアに行く。」などと言う。」

「日本の大学はビジネスに役立つ英語以外の外国語教育の予算をどんどん削っている」

【解答例1】ヨーロッパ人は、ヨーロッパ人以外を野蛮だと見なす傾向があったが、日本人は、自分たちが野蛮だと見られているという劣等感を、お金を持ち、ヨーロッパ人と同じになったと思いこむことによって払拭しようとしてきた。しかし、いまだに、お金を使うことでプライドを保ったり、自分たちはアジアの一員ではないと考えたり、お金もうけに役立つ英語以外を軽視する現象が見られることから、ヨーロッパに対する劣等感は保たれたままと思われるから。

（しなかったこと）との関係で書くこともできる。そうすべきだったのに、しなかったから、まだ残ったままだ、という道筋。あえて、前半を同形にするなら、

【解答例2】ヨーロッパ人は、ヨーロッパ人以外を野蛮だと見なす傾向があったが、日本人は、自分たちが野蛮だと見られているという劣等感を、お金を持ち、ヨーロッパ人と同じになったと思いこむことによって払拭しようとしてきた。しかし、本来は、日本には日本の独自の文明があることを大切にし、また、消費文明以外の達成からも学び、その観点から、ヨーロッパ中心主義を乗り越える道を探るべきだったのに、その道は取らず、今も消費文明の側面に固執したままだから。

■読解問題

1　日本人のどのような考え方が「植民地的な発想だと言える」のか。

2　「ヨーロッパ中心主義と日本のねじれた国粋主義の問題」が「実際には手つかずのまま」になっていると筆者が考えるのはなぜか、まとめさない。

■発展問題

日本バンザイ、日本すごい。日本は万世一系の帝の国だとか、神の国だとか、単一民族単一言語の国だとか、戦争中に唱えられた狂信的な国粋主義というものもあった。しかし、これもまた、劣等感の裏返しに過ぎない。明治以降、たくさんの国から成るこの列島を、一つのネーション＝ステートに作り替えるためのヒストリー＝イデオロギー制作の果てが、あの狂信的な天皇陛下バンザイであった。だから、その道もダメ、ということは実証済み。ヨーロッパというより、むしろ、この国にあるのは米国へのコンプレックスだろう。黒船も米国、咸臨丸が行ったのも米国、真珠湾も米国、原爆も米国、沖縄も米国だ。

しかし、筆者の表現を逆手に取ると、ほんとうに取るべき道もまた、「実際には手つかずのまま一万円札の下に埋まっている」と思われる。少し冷静になれば、その道は、今すぐにでも実現できるのではないか。そして、それは、何のためにことばを学ぶのか、という筆者の問いかけにも通じているだろう。

筆者の考えも参考にしつつ、これまで取り得なかったが、そうあるべき道のあり方を考え、論じなさい。ことばの学びについてもふれなさい。

●重要語「母語」＝国籍と母語は必ずしも一致しない。日本人が日本語を母語とする場合などは母語と母国語は一致する。しかし、日本語を母語としながら日本国籍を持たない場合もある。また、政治的・地理的独立国家を持たない言語もあり、母国語と呼べない場合も多い。一国家＝一言語は全くの幻想。